

まされる宝 子にしかめやも

銀（しろかね）も 金（こがね）も玉も 何せむに

まされる宝 子にしかめやも

万葉集に収められている山上憶良（やまのうえのおくら）の有名な句です。子どもが何にも勝る宝だとするこの歌の思いを多くの市民と共有しながら、市政の最重要課題の一つである子ども子育て支援施策の推進に取り組んでいくことが大切です。そして、「子育てするなら高松市」と胸を張って言えるような良好な環境を整えていきたいと思います。

そんな中、嬉しいニュースが入ってきました。「にっぽん子育て応援団」が全国の県庁所在都市など主要108自治体において、子育て分野におけるNPO、市民活動団体との連携状況などについて調査した結果、高松市が横浜市に次いで全国第2位の高い評価を受けたのです。6つの調査項目のうち、高松市は「施設型給付事業の実施状況」など4項目で満点の6点、「地方版子ども子育て会議」の項目が4点、「子どもの貧困対策」は残念ながら0点で合計28点でした。この結果を見ると、少なくとも「子どもの貧困対策」を除いた今回の調査項目においては、高松市の施策も十分胸を張れる水準にあると言っていると思います。

一方で、今年の4月時点での本市の保育所の待機児童数が全国ワースト9位であるという悪いニュースもありました。待機児童数については、カウントの仕方が自治体間で統一されていないなどの問題がありますが、ワーク・ライフ・バランスの推進度合いを測る中心的な指標であります。保育所や認定こども園の新增設による定数増をはじめ、さまざまな工夫を凝らして待機児童ゼロを目指していかなければなりません。そして、出産育児で仕事を離れることで生まれる女性就業率の低下、いわゆるM字カーブを解消すると同時に、男性の意識と働き方の改革を図っていくことが何としても必要です。

山上憶良が、宴の席を退出するときに詠んだ次のような一首があります。

憶良らは 今は罷（まか）らむ 子泣くらむ

其も彼の母も 吾（あ）を待つらむそ

（憶良はもう帰るといたします。子供が泣いているでしょうし、その子の母も私を待っているでしょうから。）妻や子が待っているのを家に早く帰る。そんなことの実践がイクメンを増やし、社会全体のワーク・ライフ・バランスを図っていく第一歩かも知れません。